

絵本の基材と表現

— 駒形克己の絵本作品を例として —

Materials for a Picture Book and Expression — Using Several Picture Books by Katsumi Komagata as an Example —

養 田 も え*

Moe YODA

要 約 絵本のページには一般的に白い紙が用いられることが多いが、近年ではトレーシングペーパーや布などの様々な材質のものが見られるようになった。グラフィックデザイナーであり、絵本作家である駒形克己はページの材質にこだわった絵本を多数制作している。本論ではこのような駒形克己の絵本作品に注目し、その中で基材が表現としてどのように生かされているのか考察する。本論で取り上げる、『ぼく、うまれるよ!』や『YELLOW TO RED』、『雲ひとつ』のページは様々な質感や色を持つ、特殊紙でできている。これにより、絵本の物語は紙の質感でも表現され、読者は指先を使いながら物語を読み解いていく。本そのものを身体全体で味わう、体験の場を形にしたものが駒形の絵本作品の特徴と言える。素材の特性を見極めて物語と組み合わせることで、基材の質感は絵本の物語を表現し、読者が絵本と深く関わるための要素となる。

キーワード：駒形克己、絵本、基材、質感、紙

Abstract Pages of a picture book are usually made of white paper. Recently, however, picture books made of various materials such as cloth and tracing paper have appeared. Katsumi Komagata is a picture book writer and a graphic designer. He has produced several picture books with an attention to the page texture. This study focuses on these picture books and it considers what they express. *I'm gonna be born*, *YELLOW TO RED*, and *A CLOUD* are picture books by Katsumi Komagata. The pages of these picture books are made of special paper that has numerous colors and textures. In these books, the story is expressed by the texture of the paper. A reader needs to touch it to understand the story. This is one of the characteristics of works by Katsumi Komagata. The texture of a material can express a story in a picture book. This helps the reader better understand the story in the picture book.

Key words : Katsumi Komagata, Picture book, Material, Texture, Paper

はじめに

絵本の基材とは絵本の原画や印刷物としての絵本の材質を指す¹⁾。一般に、この基材には白い紙が用いられることが多いが、現在ではトレーシングペーパーや布などの様々な材質のものを目にすることも多くなった。絵本を制作する過程で作家は絵本を印刷物と

して捉え、時にページの材質も選択しながら物語を描く。

このような絵本の物質性に注目しながら絵本を制作している作家の一人が、駒形克己（1953-）である。駒形は絵本制作の当初よりページとなる基材にこだわった、質感に特徴のある特殊紙を使用した絵本を制作している。紙という素材自体は日常で目にするありふれたものだが、駒形の絵本作品の随所には作者の紙に対する視点や紙の素材感から受けた影響が現れている。

* 家政学研究科 児童学専攻
Graduate School of Home Economics, Division of Child Studies

本論文では『ぼく、うまれるよ!』(ONESTROKE, 1995)等、ページの素材に特徴がある駒形克己の絵本作品に注目し、その中で基材が表現としてどのように生かされているのか見ていきたい。

駒形克己について

駒形克己は1977年に渡米し、ニューヨークの放送局であるCBS本社でグラフィックデザイナーとして活躍した。その後、帰国から3年後に事務所、ONESTROKE(ワンストローク)を設立する。そして、1990年代からカード状の絵本、『FIRST LOOK』(偕成社, 1990)等を含む「リトルアイ」シリーズを手がけ、その後も絵本を継続して制作するようになった。

この「リトルアイ」シリーズは三つ折りにされた複数のカードから構成された作品である。カードには穴や円、三角などの図形が描かれており、赤ちゃんが反応する色や形を使い、当時生後3ヶ月であった自身の子どもとコミュニケーションをとろうとしたことが制作のきっかけとなっている。この、絵本を読み手同士のコミュニケーションの道具として扱う姿勢は以降に制作される駒形の絵本にも引き続き現れている。

その見た目から絵本と認識されにくい面もあった「リトルアイ」シリーズだが、現在では駒形の代表的な絵本作品として数えられる。その他の代表作には一枚の紙に螺旋状の切り込みを入れて造られた『土のなかには』(偕成社, 1993)や、しかけ絵本『Little tree』(ONESTROKE, 2008)などがある。

時にそれらはしかけ絵本と呼ばれ、現在では駒形克己の絵本というと、単に平面のページに言葉と絵を印刷した通常の絵本とは異なる見た目を持ったものという印象が強い。

この特殊な見た目を支える要素の一つに、駒形の絵本にしばしば見られる絵本の基材による表現が挙げられる。

1. 基材の特性と物語

1-1. 『ぼく、うまれるよ!』

まずは1995年に出版された、『ぼく、うまれるよ!』(Fig.1, Fig.2)を取り上げたい。『ぼく、うまれるよ!』は「リトルアイ」シリーズの5年後に発表された、出産をテーマにした作品である。シンプルな図形のようなイラストで描かれた胎児が子宮の中で徐々に成長していき、最終的に母親の体から誕生する過程が描かれていく。



Fig.1 *I'm gonna be born*, first edition, 1995

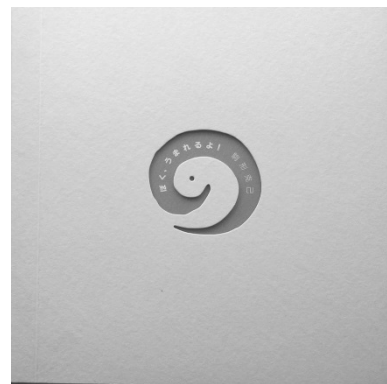


Fig.2 *I'm gonna be born*, second edition, 1999

印象的なのは胎児が母親の体から出ていく出産の場面 (Fig.3) である。ここでは切り込みによってらせん状のへその緒が見開きのページから立ち上がるしかけが施されている。複雑なしかけではないが、本文の「お母さんとつながっていたおへそのパイプ」という言葉を強調するようなしかけは、作者が出産に立ち会い、へその緒を観察した際の印象が読者へより伝わるものとなっている。

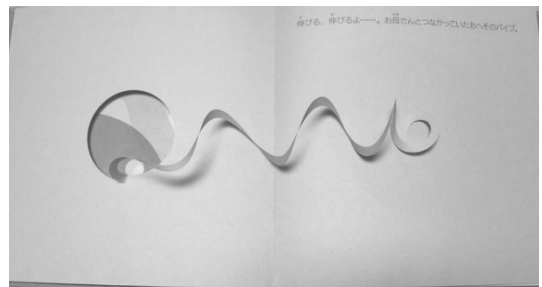


Fig.3 Birth

駒形の作品はこのようなしなやかな絵本と称されるものが主流である。自身のしなやかについて駒形は、「平面的な要素だけでは表現しきれないものが出てきたときに、しなやかが必要になってくる」²⁾と語っている。斬新なしなやかで読者に驚きをもたらすというより、必要最低限に、あくまで物語を支える表現として使用されるのが駒形のしなやかと言える。この必要性から生じたしなやかを最大に生かすという点は、『はく、うまれるよ！』に使用されるページの材質にも言える。

1-2. 本文用紙の工夫

『はく、うまれるよ！』では厚さや手触りの異なる複数の紙がページに使用されており、胎児の成長過程によってページの素材が使い分けられているのが特徴である。前述のへその緒のような派手なしなやかではないが、紙の質感は言葉では語られない物語を伝えるものとなっている。

例えば、この絵本の冒頭の大半のページに使用されるのは光をほんやりと通すことができる特殊紙 (Fig.4) である。この紙はトレーシングペーパーほど透明度が高いわけではないが、後ろに重なるページのイラストが透けて見え、平面的な画面に奥行きを与えている。



Fig.4 Special paper

人の形を持つ以前の生命の成長というのは、知識としては理解していても想像するのは難しい。しかし、本作では背面のページを透過するページにより、アニメーションのコマ送りのように細胞が母親の体内で徐々に分裂しながら大きくなっていく過程が見え、読者は物語上の時間の経過を感じることができる。これもまたへその緒のしなやかと同様、必要性から生じた素

材の選択ということだろう。

駒形は『はく、うまれるよ！』の初版のあとがきにおいて、ページが重なっても透明感を失わない特殊紙との出会いが、おぼろげだった絵本のイメージを確かなものにさせたと言っている³⁾。ページの素材が物語の表現に大きく関わっている本作は基材も物語の世界を支えるものである、という印刷物としての本を熟知した駒形の絵本制作への姿勢と共に、紙という素材そのものが創作に影響を与える力を持つことを示している。

1-3. 初版と第2版の差異

また、『はく、うまれるよ！』は1995年に初版が発行されたが、1999年に発行された第2版 (Fig.2) では、表紙と本文のページの素材が大きく異なっている。この初版と第2版との違いからも駒形の素材へのこだわりを見ることができる。

まず、表紙だが、初版はツヤのある鮮やかなオレンジ色の表紙に本文で言うところの「小さな命」が描かれている。しかし、第2版では少し空気を含んだ触感が手に残る厚紙を使用し、「小さな命」が型抜きされたものとなっている。この第2版の表紙の改訂には、本を手にした読者が、母親のぬくもりをより感じられるような素材を使用するという作者、駒形のねらいがあった⁴⁾。また、第2版の表紙の色も人の肌色に近づけた、白に淡いオレンジ色が入ったものである。この表紙の改訂により、『はく、うまれるよ！』は本自体が母親そのものという、「小さな命」と母親の関係性を強調するものとなっている。

一方、本文のページの素材は第2版ではほとんどが、背面が透けず、光を通さない用紙へと変更されている。しかし、「小さな命」が羊水の中にいる場面だけは、初版、第2版共に透過性の高い用紙が使用されている。この場面だけは、羊水の中にいる様子を表現するために、第2版の改訂でも光を通す透明な素材の使用が必要とされたことが考えられる。この用紙は全面に波のような線状の凹凸がついたものであり、手触りも特殊である。これにより、「小さな命」の成長に合わせて変化していく母親の胎内の様子が、見た目だけでなく手触りからも感じることができる。

基材の特徴と母親の胎内という物語の環境を重ね合わせることで、出産の過程で何が起きているのか、読者がより物語を実感できるようにしたものが『はく、うまれるよ！』と言える。

2. 基材そのもので表現する

2-1. 紙の質感

駒形作品において基材はイラストレーションを支えるだけでなく、時にその質感そのものが主役となることもある。『ぼく、うまれるよ!』の一年前に制作された、『BLUE TO BLUE』『GREEN TO GREEN』『YELLOW TO RED』（共に ONE STROKE, 1994）（Fig.5, Fig.6, Fig.7）の3冊もページとなる紙にこだわり、その質感が表現の主役となった絵本である。この3冊は1994年に制作された駒形克己の初期の作品にあたる。

これらの作品はタイトルからもわかるよう、特定の色を基調とした手触りに特徴のある用紙がページに使用されている。通常、絵本は原画が印刷されたものとして成り立っているが、この3冊において印刷が使われている部分は文章などの一部分だけであり、作品

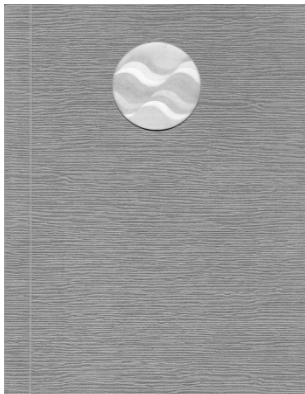


Fig.5 BLUE TO BLUE, 1994

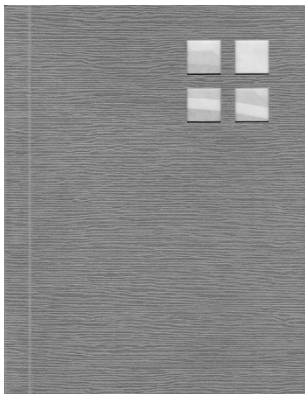


Fig.6 GREEN TO GREEN, 1994

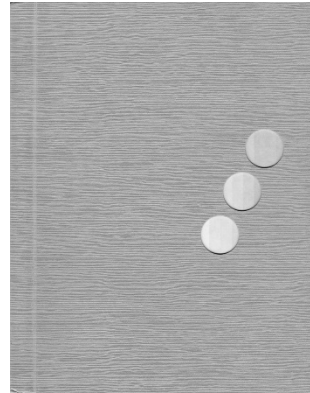


Fig.7 YELLOW TO RED, 1994

内の大部分で基材そのものの色がそのまま生かされている。

基材に使用される紙はファンシーペーパーやファインペーパーと呼ばれる種類のもので、数多くの風合いや色合いの銘柄があり、書籍から広告まで多くの場所で使用される特殊紙である。作者、駒形を含むグラフィックデザイナーにとっては仕事の上で欠かせないものでもある。

また、穴や切り込みの他、ページの上に時折動物の形に切り取られたページが挟まれる、という点が3冊に共通する主な造りとなっている。

中でも鮭の成長を描いた『BLUE TO BLUE』は特殊紙の使用の他、穴や切れ込みなど一冊の中で様々な試みが行なわれている作品であり、駒形の代表作として広く知られた作品のひとつである。しかし、本論では『BLUE TO BLUE』よりもしかけの種類が限られ、絵本の基材に注目しやすい『YELLOW TO RED』を取り上げ、質感に特徴がある基材が物語の中でどのように活かされているのか具体的に見ていきたい。

2-2. 『YELLOW TO RED』

『YELLOW TO RED』の物語は迷子になってしまったひよこがインコやワシなどの様々な種類の鳥たちに会いながら自身の親鳥を探す、しだいに日が暮れていってしまうというものだ。

物語の進行と共に次第に幅が広がっていくページの間に、鳥の輪郭に沿って切り取られたページが挟まれる、という作りになっている（Fig.8）。

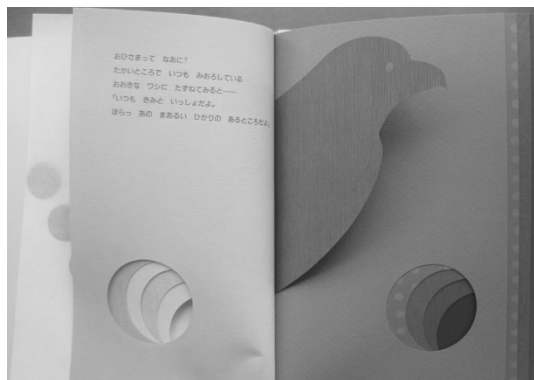


Fig.8 YELLOW TO RED, spread

まずこの絵本を手にして分かることは、登場する動物のイメージとそこで使用される紙との関係である。主人公となる、ひよこの形にカットされたページの紙 (Fig.9) はよく見ると細かい紙の繊維を見ることができ、ひよこの柔らかさが感じられる。それに対して、ひよこが道中に会える他の鳥、ワシに使われている紙 (Fig.10) は表面に凹凸があり、触れるとより厚さを感じる固いものとなっている。このように、物語に登場するそれぞれの鳥のイメージに合わせ、ページをめくるたびに質感の異なる紙が使用される点が本作の大きな特徴と言える。

同時に、『YELLOW TO RED』に登場する鳥たちの姿はみな特徴をつかみながらも、簡単な形で表されている。指先だけでもページの質感の違いは感じ取れるが、描かれる鳥たちの造形が簡素な分、読者は自然と



Fig.9 A chick

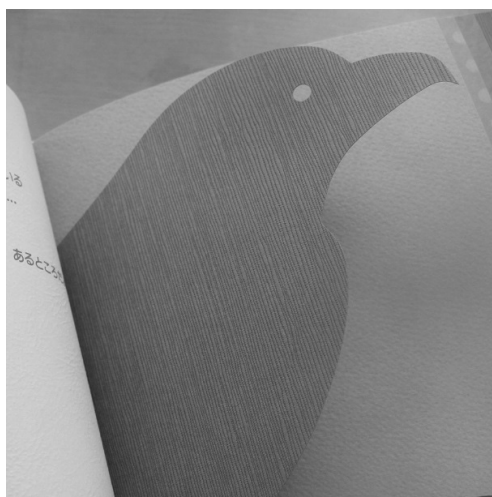


Fig.10 An eagle

紙の質感に注目することになる。作中で使用される紙の質感は実際の鳥の手触りとは当然異なる。しかし、鳥のイメージと紙の素材とを結びつけながら読むことで、読者はより物語の世界を身近に、体験するような感覚で楽しむことができるだろう。

また、すべてのページの下部分に共通して空いている穴からはその後に続くページの重なりが見えるようになっている (Fig.8)。本作の大部分を占める、登場する鳥たちの背景に置かれるページの色は本全体を通してみると、物語が進むにつれて黄色から赤へと徐々に変化している。めくるたびにグラデーションのように重なっていくこれらのページは太陽の色が朝から夜へと変化していく時間の経過を表したものであり、それぞれが質感の異なる紙からできている。

通常、絵本の原画は絵の具やインクなどの画材を用いて制作され、使用する画材によって描かれるものの印象は大きく変わる。『YELLOW TO RED』では絵の具やペンなどの画材が使用されているわけではないが、多様な紙の素材自体にそれぞれの質感や印刷で生じる色とはまた異なった色があり、基材の選択は画材の選択と同じくらい画面に与える影響が大きいことに気づかされる。

『YELLOW TO RED』は『ぼくうまれるよ』と同様、物語の時間や環境の変化を色と基材の変化で示した作品でありながら、よりページである紙の質感を意識させる作品と言えるだろう。

そして、その後の2007年にも駒形は紙という素材そのものを見せる絵本を発表している。それが『雲ひとつ』(ONE STROKE, 2007)である(Fig.11)。



Fig.11 A CLOUD, 2007

2.3. 『雲ひとつ』

先述の『YELLOW TO RED』を含む3冊の作品は、容姿に特徴がある具体的な生き物を描くために、特殊な紙の質感や色が生かされた絵本であった。それに対して、『雲ひとつ』で描かれるのは形や色がより曖昧な雲の様子である。

『雲ひとつ』は風によって変化する、雲の形や動きを描いた作品である。すべてのページには雲の輪郭となる様々な形をした切り抜きがあり、これをめくことで切り抜かれた部分が前後に続くページに重なっていく(Fig.12)。この切り抜きから見えるページの重なりによって、雲の色や形の変化が表されている。

特徴的なのは基材が種類の異なる白い紙のみで構成されている点である。作中では雲を主役に描きながらも、空の様子を表す色はほぼ使われていない。唯一使われている色は、最終場面の日が暮れて、星空へと変わりつつある空を描いた淡いグレーのグラデーションの部分である。

その代わりに、空や雲を描くのは白い紙である。本文に使用されている紙は画用紙のような凹凸のあるものや、ケント紙のようなスベスベした紙など、みな白に近い色でありながら触れてみるとその表情の違いがわかるものとなっている。また、色自体も一見同じような白に見えるが、光を反射するような明るい白やクリーム色に近い控えめな白など様々な白い色が使われている。ページごとに微妙に異なる白い色の紙は雲をとりまく空の光の変化のようにも捉えられるだろう。切り抜きのみという平面的なしかけながら、基材に質感の差を加えることで、描かれる雲は奥行き



Fig.12 A CLOUD, spread

や立体感を感じさせるものになっている。

また、この白に近い色で統一されたページは基材である紙の表面の変化をよりわかりやすくした。多様な紙を使用した『YELLOW TO RED』と比べると、『雲ひとつ』はそこからさらに色という情報が引かれており、一見、『YELLOW TO RED』にあった紙の素材が持つ特徴のひとつがなくなってしまったかのように見える。しかし、これにより読者は紙という素材そのものの多様性や表情と向き合うことになる。

絵本に限らず、本の基材はそもそも絵や文字が印刷されるためのものであり、それを手に取る読者は印刷された物語や情報の方に目が行ってしまう。しかし、そのような本の内容を味わう際、私たちはそれと同時に基材である紙の表面を見ているとも言える。

『雲ひとつ』の物語にははっきりとした起承転結がなく、言葉も少ない。流れる雲の様子を眺め、自由に解釈する作品である。しかし、それは受け身なものではなく、読者自らが能動的に基材である紙の微妙に異なる色や質感を理解しようとすることで初めて、実際に触れることはできない雲が浮かぶ空の情景が見えてくる。基材である紙そのものを観察し、捉えるという冷静な視点と共に、読者と絵本の世界をつなぐためのしかけとして、紙の質感が生かされた作品が『雲ひとつ』と言える。

3. 体験する絵本

『YELLOW TO RED』と『雲ひとつ』は共に基材の質感が表現の中心に置かれ、その質感を自由に読むことは読者が物語の世界を広げるきっかけとなっていた。基材の質感に凝った駒形作品を理解するには読者が実際にページに触れ、描かれているものを理解するだけでなく、自身の身体の繊細な感覚を使いながら読む必要がある。本論で取り上げた作品では紙の質感が身体感覚を刺激するようなしかけとして扱われて

いたが、駒形の絵本作品にはこの他にも読むのに身体感覚を伴うような作品が多い。このような作品からは、駒形の絵本に対するひとつの思いを読み取ることができる。

「子どものための絵本には、経験を共有するという大切な要素があります。」⁵⁾、「読み聞かせという経験は、一人ではできません。」⁶⁾。このように駒形が語るように、駒形の絵本制作の背景には絵本を読む子どもだけでなく、絵本を共に読む大人の存在が意識されている。「リトルアイ」シリーズの制作のきっかけからもわかるが、絵本を子どもと大人の間に置き、その読み手同士のコミュニケーションを含めて絵本を考えるという姿勢は駒形の絵本制作の当初からあるものである。

絵本を誰かと共に読む、という経験を重視した上で制作された駒形の絵本作品はどれも本と読者との距離がとても近いもののように思える。紙の質感や切り抜きは本を手に取り、指で触れることで初めて理解することができる。これらの読者の身体感覚に訴えかけるような、本そのものを使ったしかけは大人数で楽しむというより読者各々が絵本とじっくり向き合うことで、同じ絵本を共有する者同士の体験をより物理的な実感を伴ったものにするだろう。

絵本を観察し、本そのものを身体全体で味わうという体験の場を形にしたものが、駒形の絵本作品にある特徴と言えるのではないだろうか。

4. 物としての本

一方で、本論で取り上げた作品において、読者が絵本と向き合うための主なしかけとして使われたのは紙の質感である。絵本に様々な素材が使われることは冒頭でも述べたが、駒形克己の絵本作品の場合、基材となるのは特殊紙であった。これらは見た目も手触りも個々に特徴のあるものではあるが、すべて紙である。そのため、少しでも乱暴に扱えば破けたり汚れたりしてしまい、強度のあるものとは言えない。特に、『雲ひとつ』のように紙面に大きな切り抜きがいくつもある作品は、ページをめくる際にも慎重に扱わなければならない。子どもが繰り返し読むものであるはずの絵本が丈夫でないのは心もとない気がするが、この繊細な紙の素材は本来、本が紙という比較的弱い素材からできた「物」であることを実感させるものである。

今日、電子書籍等、文章は様々な機器を使って読むことができ、本の形は必ずしも紙でできたものとは限

らなくなった。しかし、紙の本への注目が薄れたというわけではない。現在では印刷の再現性の高さと質感を兼ね備えた紙も開発されている。いかに早く、綺麗に印刷できるかという機能的な面だけでなく、質感や色合いなど、人の感覚へ訴えるような紙が持つ特性への注目は今後も変わらないものと思われる。

また、紙の本はますます物性を強め、物質として存在する本だからこそできる表現や価値が見出されていくのではないかと指摘されることもある⁷⁾。手触りや風合いを意識した、駒形の絵本作品における紙の選択からはそのような「物としての本」が持つ可能性が感じられる。多様な素材から作られた「物としての本」を通して、日頃忘れがちな触覚をはじめとした自身の体が持つ繊細な感覚を実感することは今後も求められていくのではないだろうか。

おわりに

本論で取り上げた3作品の基材には比較的柔らかい特殊紙が使用されていることもあり、作品自体の見え方も優しい雰囲気となっている。

本は個人が所有できる物であり、絵本などは特に幼い時の記憶や体験と共に存在することが少なくない。紙の手触りや湿度など、本そのものを味わうことは絵本という物と読者との体験を強く印象付けることにつながるように思う。駒形作品に見られる基材の質感によって作られた柔らかな空間は、絵本を読むという体験をあたかなものとするために一役買っていると言えるだろう。

しかし、ここでの基材は単に見た目を柔らかくするための装飾となっているわけではない。透明感のある紙が母親の胎内の環境の変化を、白い紙の質感が雲の様子の変化を表したように、基材の質感は物語の中の環境の変化や時間の経過を言葉でなく、読者の指先を通して直接伝えるものとなっていた。そして、これらの物語に描かれる変化を実感するためには単に絵本を読むだけでなく、読者自らページに触れ、基材の変化を感じる必要がある。普段なにげなく眺めている本を構成する素材を捉え、観察するという特徴は今回取り上げた3作品に共通するものだ。

基材である特殊紙の質感は作品の見た目に柔らかな印象を与えながらも、そこには絵本を基材そのものから考えるという作者駒形の冷静な視点がある。駒形作品における、質感に特徴がある特殊紙の使用は読者が物としての本と触れ合うため、必要から生まれたし

かけのひとつと言えるだろう。

基材はあくまでも絵本を構成する一部分であり、それだけを取り出しても造本の材料としての姿しか見えない。しかし、素材の特性を見極めて物語と組み合わせることで、基材は時に表現の一部となり、読者が絵本と深く関わるための要素となるのである。

参考文献

単行本

1. 今井良朗編：『絵本とイラストレーション』，武蔵野美術大学出版局，(2014)
2. 中川素子編：『絵本学講座①絵本の表現』，朝倉書店，(2014)
3. 駒形克己：『9つの色』，ONE STROKE，(2004)
4. 竹尾：『株式会社竹尾創立百周年記念出版 紙とデザイン 竹尾ファインペーパーの五〇年』，竹尾，(2000)
5. 日本・紙アカデミー編：『紙－昨日・今日・明日：日本・紙アカデミー25年の軌跡』，思文閣出版，(2013)
6. 原研哉，阿部雅世：『なぜデザインなのか。：Dialogue in design』，平凡社，(2007)
7. 松田行正：『デザインの作法 本は明るいおもちゃである』，平凡社，(2018)

8. 和田誠：『装丁物語』，白水社，(2006)

雑誌

1. 駒形克己：絵本に込められたメッセージ，『別冊太陽』，108，134-137 (1999)
2. 今井良朗：駒形克己－形に囚われないデザイン思考が読み手の感覚を刺激する，『絵本 BOOKEND 2016』，13，絵本学会，19-23 (2016)

引用文献

- 1) 生田美秋，石井光恵，藤本朝己編：ベーシック絵本入門，ミネルヴァ書房，23 (2013)
- 2) 駒形克己：伝えたいことを表現するのに，しかけが必要でした。『母の友』8月号，735，22 (2014)
- 3) 駒形克己：『ぼく，うまれるよ！』，ONE STROKE，(1995)
- 4) 中川素子，坂本満編：『ブック・アートの世界 絵本からインスタレーションまで』，水声社，144 (2006)
- 5) 前掲2)，23
- 6) 前掲2)，23
- 7) 池澤夏樹編：『本は，これから』，岩波書店，221 (2010)